
(仮) 牙を持つもの

牙を持つもの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（仮）牙を持つもの

【Nコード】

N6401P

【作者名】

牙を持つもの

【あらすじ】

神様のミスで、死んでしまった主人公は、チートな能力をもらいネギまの世界に転生させてもらい原作ブレイクをめざす。

設定（前書き）

初めてなので、つたないかも知れませんがよろしく願います。

設定

アリナ「スプリングフィールド」

身長：158cm 体重：40kg 性別：男

魔法属性：全属性＋王家の魔力

容姿：アリカ・アナルキア・エンテオフュシアを優しくし幼くした顔、髪は腰まで届くくらい伸ばしている為よく女の子に間違われる。ぱつと見た目は頼りなく見えるが、服の下には小さい頃から鍛えてきた筋肉が引き締まって力強い肉体が隠れている。

趣味：料理や読書と体を鍛える事

魔法媒体は祖父からもらった指輪（強度はネギが持つ杖と同等の強度を持つ）

魔法媒体なしでも魔法を発動することができる

魔法始動キー アナク・イクセル・ナオ

詳細：ネギの双子の弟でネギと違い父親に対して何の憧れも持っていない。

そのため、ネギとの中もあまり好く、魔法学校に入学して以降二人はまったく喋っていない。

ネギ自身悪魔襲来し、病院に収容されていたときに、自分は父親に助けられたと自慢したことが負い目になってアリスとの関係を改善できないでいる。

ネギは従姉のネカネと一緒に暮らし、アリナは学校の近くの山の中に建てた家で暮らしていた。

祖父と姉の二人の関係を心配しているが、そのことをアリス自身まったく気にしていない。

攻撃魔法の成績は真ん中くらいに設定をし、治療系や薬学、補助系統は総てぶつちぎりのトップを叩き出していたが多くの教師はあまりいい顔をしていなかった。

魔法使いが目指す「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」にな

る気も目指す気も現状では無い。

神からもらった能力

魔力は木乃香の100倍、気はラカンの100倍

黄金率EX

この能力いしうお金に不自由することがなく逆にお金がたまっていく

アルティマ・ステイグマ
複写眼

発動時には、眼の中心に朱の五方星の模様が浮き出ている。

この眼の保持者は、魔法の発動を1度見ただけで、魔法のすべての構成を読み取り、自分のものにすることができる。リスクを無くして使用可能にすること

シャドウ・スキルの真修練闘士の身体能力と魔導師の魔道技術。
ハイ・セパール ラザレム

暗黒魔闘術 魔力を圧縮するため、魔力が変質し魔法障壁や魔法防御は一切効果をはつきしない。

バスタードの総ての呪文と詠唱破棄、神霊術

道具作成スキル 古今東西や平行世界や異世界の総ての神具や道具・魔法薬を作成する。自分で材料も作ることができる。

無限に物が入る倉庫

買った物や作ったものを無限に保管しておくことができる倉庫。
なお倉庫内のの時間は物を入れた時点の時が止まり食料などの保存に便利で、己が望んだものをすぐに取り出すことができる。

設定（後書き）

がんばって書いていこうと思いますので応援してください。

第0話 転生

Y 書類が山積みになっている執務室で一人の少年が、書類の決裁をしていた。

書類には書き直し厳禁！修正不可！機密事項アリ！汚れも厳禁！と書かれていて、少年の地位がかなり高いことがわかる。

少年の態度は地位に見合ったものではなく、その態度は、どちらかという和不真面目で傍らには漫画や雑誌が積まれていた。

「うーん、何か面白いことないかな」

コーヒー片手に、雑誌を読みながら不真面目な態度で、書類にサインをしているとバツーン

音と共に一人の生真面目そうな少女が入ってきた。

少女は少年の不真面目な態度を見ると、プルプル声を震わせ、頬を引きつらせながらと聞いてきた。

「な、な、なにやってんですか」。きちつと真面目に書類整理してください」

少年は少女に目を向けそっけなく言い切った。

「別にいいだろ？書類はちゃんとやってるんだから」

その答えに少女の怒りをが爆発した。

「真面目に仕事をしなさい！！」

と、怒りの怒声を上げた。

その怒声に驚き、コーヒーを書類にこぼしてしまった。

「あゝしまった！」

少年は慌てたが後の祭りだった。

少年の慌てように、少女の方も書類のことが気になったのか書類を覗き見ると顔色を変えてしまった。

その少年が、処理していた書類には青年の名前が書かれていた。

「ゲッまずいわね。これって、下界の人間の寿命に関しての書類

じゃない！なんで、あんな不真面目な態度で、こんな重要機密を処理してるのよ！！」

執務室に少女の怒声が再び響き渡った。

「どんな態度で僕が、仕事をしようとかまわないだろ。それより、この子を今日中に死んじやうから、君にも責任があるんだから、迎えにいつてここに連れてきて」

少年の言いように引掛かるものがあるが少年の言い分にも一理あるので青年を迎えに行くことにした。

少女が、迎えに行くと丁度鉄骨の下敷きになり青年が死んだ直後だった。

「ねえ、あなたは草薙 剣君でいい？」

目の前に現れた少女は、魂だけとなった剣に聞いてきた。

かなり胡散臭く自分が、死んだことのショックから立ち直っていないが、少女の問いかけに剣は聞かれたことに答えた。

「そうだけど、君は何者なんだい？」

自己紹介をしていないことに気づいた少女は慌てて自分の正体を明かした。

「私の名前はライラ。とりあえず、君について来てほしい所があるんだけど来てくれない？」

ライラの問いに、引っかかる事があつたがとりあえず自分は死んでいるので、やる事も無いのでついていく事にした。

「わかったよ。ついていくよやる事もないし」

剣の了承を得るとライラは、両手を合わせゲートを展開しライラと剣はゲートをくぐった。

ゲートをくぐると少年がいた執務室についた。

少年は青年を見るといきなり土下座をして謝った。

「申し訳ない。こちらのミスで君を殺してしまった。」

少年は事のしだいを剣に話して、イレギュラーな死のため、輪廻に戻れないので平行世界への転生をしないかと剣に問いかけた。

剣も済んだ事だとして謝罪を受け取り、条件付で平行世界への転生を了承した。

「一つ、伝説の勇者様の写眼ハイ・セパール〈アルティマ・ステイグマ〉のリスクなし。二つ、バスタードの総ての呪文と詠唱破棄をできるようにすること。三つ、黄金率EX。四つ、魔力は木乃香の100倍、気はラカンの100倍。

五つ、シャドウ・スキルの真修練闘士ラザレムの身体能力と魔導師の魔道技術。

六つ、暗黒魔闘術 魔力を圧縮するため、魔力が変質し魔法障壁や魔法防御は一切効果をはつきしない。

七つ、道具作成スキル 古今東西や平行世界や異世界の総ての道具を作成する。材料も手に入れることができる。」

少年は、かなりあきれた様子で剣を見ていたがまっぴつかと気楽に言い。

楽しそうに剣に力を与え転生の準備に取り掛かった。

剣は良いのかよと思いつながらも自分が言ったことなので突っ込まなかったが少年の正体が気になり思わず聞いてしまった。

「君は何者なんだ。どこに転生するんだ？」

作業が終わって剣が聞いた問いに少年が答えた。

「僕は、君たちの概念で言うところの神だよ。転生する世界は、魔法先生ネギまだからね、平行世界だから原作ブレイクOKだよ。ち

なみにネギの弟だから名前はアリナ」スプリングフィールド性別は男だよ。じゃあ、転生に行こうか、転生呪式開始」

そして、剣の周りに光の粒子に包まれ転生が始まった。

第一話 卒業

光に包まれ、輪廻の輪に入り転生をして気がつくと、自分の傍らにもう一人赤子がいることに、気がついた。

母親らしき金髪の綺麗な女の人が、自分たちを見つめるその瞳には、慈愛と慈しみが宿っていた。

すると、玄関のドアが、いきいよく開くと一人の赤毛の青年が入ってきた。

「アリカ！子供は生まれたのか！！」

女性の名はアリカというらしい、青年はアリカの隣で寝ている双子に語りかけた。

「俺が、最強の魔法使いナギ」スプリングフィールドだ。そして、お前たちの父親だ！」

と、大きな声で言ったため、アリカと飛ばれた女性は拳を握り締め、ナギと呼ばれた青年をおもいきり殴った後、ナギに雷を落とした。

「うるさいわ！この子達が起きてしまっただろうじやろが！大体お前は、もう親になったんじから少し落着きをもたったらどうなのじゃ。クドクドクドクドクド」

ナギはアリカの説教を聴き終わると、不意に子供たちの事についてアリかに切り出した。

「アリカ。どっちが兄でどっちが弟なんだ？」

ナギの問いにアリカは目を瞬かせナギの問いかけに答えた。

「赤毛の子が兄で、金髪の子が弟じゃ。この子達の名前は決まったのかナギよ？」

ナギはアリカの問いかけに顔を明るくさせなが言い放った。

「兄のほうかネギで、弟のほうかアリナだ。兄のほうは、俺似だろうから俺の名前をもじってネギ、弟のほうはアリカ似だろうから、アリナきつと二人とも俺達に似て強くなるだろうしな」

ナギの名前の付け方に何か言おうとしたが、アリカはナギの自信満々の顔を見て意見を変えるつもりが、無いのをわかり言うだけ無駄と判断しやめた。

「ふー、わかった。この子達の名前はその名でよい。」

アリカは予てより、ナギと相談していたことについて聞いてきた。

「ナギ。本当にこの子達をナギの親戚に預けて置いていくのか？危険なのはわかってているのじゃが、本当にこの子達を連れて行くことはできないのか？」

アリカの悲しそうな問いかけに、一瞬だけつらそうな表情を浮かべアリカの目を見て毅然とした態度をした。

「アリカ。俺たちには敵が多い、この子達の健やかな成長を願うのなら親戚やスタンの爺さんに預けるのがベストだ。それに、あそこならメガロメセンブリアの手からも逃れることもできるしな」

最後はいつもの能天気な声でアリカを安心させるように答えた。

「それが、今のところ最善か……。私たちは無力だな……………」

「

アリカは落ち込みながらも子供たちの今後の心配をし、自愛の表情を浮かべながら子供たちの頭をなげながら、微笑をうかべた。

ナギの故郷の村

村の一人の老人の家で話し合いが行われていた。

「ナギよ。本当によいのだな」

「ああ、いいんだ。スタンの爺さん、俺たちと居ると命の危険が

付きまとうだろうからな。ネカネたちにも二人の面倒を頼んであるしな大丈夫だろ」

杖を持つ二人の魔法使いは向き合い赤子たちの今後について話し合った。

ナギの方は楽観的だが、子供たちのことを本気で考えていることがわかり、スタン老親もナギが、折れることが無いことが、わかりため息つきながら二人の赤子を気にかける事をナギに約束をした。ナギはスタンに頭を下げるとドアから家の外に出ると、「ありがとう」と言い空に飛び立った。

残された老人は悲しさと寂しさの入り混じった表情を浮かべ、小さな声で「ばかものが」と悲しそうに言った。

二人の赤子はナギの親戚の家出養われることとなり、実質ネカネが面倒を見ることとなる。

それから、二人はスクスクと育ち、性格の違いが早くも出てきた。兄であるネギは、英雄である父親に憧れ、ピンチになったら父親が助けてくれると思い無茶をやる性格となり、一方、弟のほうは体と精神を鍛え魔法の勉強に集中し、英雄である父親の事にはまったく興味を示さなかった。

そして、二人が三歳のとき事件が起きる。

突如悪魔がナギの故郷の村に襲来し次々と蹂躪し村の人々を石に変えていった。

二人とネカネの前に悪魔が来て絶体絶命の危機に、二人の父親のナギが突如現れ悪魔たちを撃退し、アリナがナギの杖を受け取るところを拒んだためネギに杖を渡すといずこかに消えていった。

それから、三日後三人は救助されメルディア魔法学校に入学することになった。

二人とも同じように力を求めていったが、ネギとアリナの力についての考え方がまったく違った。

ネギの方は、魔法の力は人を救うための力だと思い込み、魔法の勉強のみに重点を置き、アリナの方は、魔法の力は単なる手段の一

つと捉え肉体とて、精神の方が重要性が高く鍛える事を重点に置いた。

そして、この事件を境に双子の心は完全に離れ、考え方も違うようになっていった。

ネギはその光景に自分がピンチになればお父さんが来てくれるとおもったから罰が当たったんだと思い込み、アリナは自分は自分親は親として己の肉体と精神を鍛え勉学にも励んだ。

ナギとアリナではネギの方が非社交的で年相応より幼く自分が正義と思い込む癖がある。一方アリナのほうが、社交的で実年齢より大人びていて一般常識があり客観的な視点で物事を見ることが出来る。

そう、この時点で二人の考え方を気づいていれば決定的なことはならずすんだだろう。このことに、周りの魔法使いたちが気づくのはもつと先の話である、その気づいたときにはさっそう手遅れまですすんだときである。

それから九年後・・・

メルディアナ魔法学校

「メルディアナ魔法学校卒業生代表！ ネギ・スプリングフィールド！」

「ハイ！」

薄暗いホールの中を、ネギ・スプリングフィールドがゆっくりと

進んでいきます。

ネギは幾分か緊張しているものの、しっかりとした足取りで壇上に上がりました。

10年近い時間を共に過ごしていたせいか胸に来るものがある。

アリナは、実際に魔法学校で習う攻撃魔法はかなり手お抜き全体の間中くらいの実力と周りに思わせていたため、治癒系、防御系、結界系、魔法具系、儀式魔法系は思いっきり実力を出しネギを置き去りにするほどの実力を出しているが、地味すぎるために、立派な魔法使い《マギステル・マギ》になろうとするネギに対する周りの魔法使いの先生の期待はアリナに対するものよりはるかに大きい。

しかし、生徒達に人気があるは、非社交的なネギではなく、社交的なアリナである。

ネギと比べると社交的アリナは基本的に、自分から話しかけることは無いが、本当に相手が困っているときには力を貸し、相手が問題が分から無い所はわかる様に噛み砕いて教えることがある。

しかし、アリナは勉強をやらずにいたそれ故に、魔法使いの卵に対しては一切手を差し伸べることはしなかった。

アリナ自身、メルディアナ魔法学校では、戦闘系より研究者的な位置づけをしていた。それ故に、魔法使いの先生達より人気と信頼があり、ファンクラブなど存在した。アリナの同級生や後輩のほうで、アリナの実力を大雑把だが把握していたが実力を隠す理由を聞きそのことを先生達に言わずに、ファンクラブ内での秘密として、アリナの本当の実力は魔法使いの大人たちは知らなかった。

教師の多くはネギに期待をし父親と同じ立派な魔法使い《マギステル・マギ》になってほしいと思っていてネギに対してはナアナアで済ませる多く、悪いことをしてもネギはやりわり注意もされることあったが、厳しく叱られることはなかった。

小さい頃から、子供は悪いことをしたら叱り、良い事をしたら褒めることをされなかったネギは、少しずつではあるがネギは歪んで

いったが、アリナはその歪みがもう修正不可能と判断し完全に切り捨てる覚悟をしていた。

壇上から戻ってくるネギと目が合いますがすぐにそらされた。

・・・ネギはどうも僕のことを避けている。

特に、悪魔襲撃事件があつてからは、一緒に食事どころか、会話すらしない。

というより、僕を含めた周囲との関係を拒んでいるようにも思える。

我が兄ながら、先行きが心配になる振る舞いだな。

卒業式が終わり、ネカネ姉さんとアーニヤが私のところへ来た。

「アリナ、卒業おめでとう！」

「おめでとう！」

「ありがとうございます、姉さん。アーニヤもおめでとうございます」

祝福の言葉と共に私を抱きしめてくれるネカネ姉さん。

なんだか恥ずかしいのだが、でも嬉しくもある。このぬくもり、大好きです。

ネカネ姉さんには本当にお世話になつて感謝してもしきれない。それにしても・・・。

姉さんから身体を離して、僕は首をかしげながら。

「姉さん、アーニヤ、ネギは？」

僕がそう言うと、2人は若干顔を哀しげに歪めました。

僕は、そうか、と呟くと、それ以上は何も言わなかった。それをどう思ったのか、アーニヤが慌てたように。

「あんたの修行地はどこだった？ 私はロンドンで占い師よ」
と言ってきた。

アーニヤに言われて、僕は初めて修行地のことを思い出した。
慌てて内容を確認してみると、そこには・・・。

「日本の学校で教師をすること」

その後校長室に抗議しに行ったネカネ姉さんが倒れたり、ネギと
アーニヤが青春したりといろいろありました。

第二話 旅立ち

飛行機の発着場のロビーでメルディアナ魔法学校の校長室での校長とのやり取りを思い出していた。

ネカネ姉さんが倒れたのでアーニヤにネカネ姉さんの付き添いを頼み、アリナは校長である祖父に問い詰めることにした。

「僕は兄さんとは違います。校長これはあなたが仕組んだことですな」

校長である祖父に対して、しっかりと相手の目を見据えて確りとした意思を持って問い詰めると、意外にあっさりとその事を固定した。

「そうじゃ。おぬし達兄弟を守るためにしかたいことなんじゃ」それは、疲れたようなそれでいて、自分の力の無さに嘆くような呟きだった。

「MM元老院の連中が原因ですか」
確定的な言い方だが、それは真実だった。

メルディアナ魔法学校の自分は校長とはいえ自分は一介の魔法使いでしかなく元老院の命令には、従わなければならない事はわかっていたが、アリナがそのことに気づいていることに驚いた。

「な、どうしてそう思うのじゃな？」
動揺を隠せずにアリナに聞くとあっさりといった。

「メルディアナ魔法学校の校長に命令できる場所は限られているからね」

その答えに納得しつつも、アリナが元老院の人間を警戒していることがわかった。

「卒業課題の研修先は麻帆良学園じゃ。何心配するな近衛近右衛

門はわしの友人じゃ信用していいぞ」

その答えに、アリナは少し警戒したような雰囲気を出しながら聞いてきた。

「おじいちゃん、信用はできると、では信頼はできますか？」

何を警戒しているのかわからないがアリナの問いを聞き少し考えながらその質問に答えた。

「た、たしかに、信用はできても信頼はできぬやつだったし、あやつは、愉快犯的なところがあるからの」

その答えを聞くとアリナはかなり厳しいかをしながら聞いてきた。

「では、聞きますが関東魔法協会の理事長に、魔法のことを知らない孫はいますか？」

なぜ、そのようなことを聞くのかわからないが、少し調べればわかることなので答えた。

「近右衛門に孫はいるぞ、親はお前達の父親の盟友・青山詠春、現在は近衛詠春じゃ。魔法のことを親の方針で知らない女の子じゃ仲良くするのじゃぞ」

その答えにアリナは頭を抱えた。

「・・・今の答えで、確信が持てました。関東魔法協会の理事長は僕やネギを使い、その子をこちら側に引き込むつもりですよですね」

アリナの確信に満ちた答えにメルディアナ魔法学校校長は驚愕の表情を浮かべた。

なぜなら魔法は秘匿するものであり公開や洩らすことなどもつてのほかだからである。

「な、なぜそのように思うのじゃ、近衛のやつは仮にも関東魔法協会の理事長じゃそのようなことは起こすまい」

アリナの答えにかなり動揺しながら、実はあの性格ならありえるのかもしれないと思っていたが、表情に出さずに心配ないとアリナに言った。

「では、周りやその他の環境に、慣れるために早めに行こうと思

います。僕だけは来月には麻帆良学園に行くと、関東魔法協会の理事長に伝えといてください」

その答えに、あまりこちらに痛くないという意味が感じられ曲げる気もないのもわかっていたので了承した。

「わかった。先方には伝えておこう。アリナやお前はわしたちを恨んでいるのか」

アリナは、とても嬉しそうに笑顔で今までのお礼を言った。

「いままで、育ててくれてありがとうございました。いいえ、うらんでいません」

そついうと校長に背を向け校長室から出ようとする校長から声がかかり振り向くと魔法媒体らしき指輪を自分に向けてぱーんと投げてきた。

「待ちなさいアリナ。その指輪は、ネギが持つナギの杖と同じラックの魔法媒体じゃ。アリナのために創らせたものじゃ邪魔にならないからもって行きなさい」

指輪を見て一目見てそれが大変高価なものだと解り、アリナの目に涙があふれてきた。

自分のことを心配してくれる肉親がいることがとても嬉しかった。

「おじいちゃん、ありがとう」

お礼を言つと指輪を指にはめ校長室を退席した。

メルディアナ魔法学校へ廊下へ

ネカネはアーニヤに看病され落ち着くと校長室に戻り、入れ違いになりアリナとの事のあらましを聞きアリナを探していると、ありながこちらにあるいてきた。

「アリナ！来月には日本に行くってほんとなの」

驚いた様子のネカネに至って冷静にアリナは答えた。

「ええ、日本語はすでにマスターしてありますし。それに、あそこの学園長も一癖も二癖もある人物だそうですね」

肩をすくめながら言うアリナにいたたまれなくなったネカネはアリナを抱きしめいままでのことを謝罪した。

「ごめんね、つらいときも苦しいときもかまってあげれなくて、平等に接しなければいけないのに、確りしていたアリナをほおっておいて、危なっかしいネギばかりかまってごめんね」

ネカネの涙を流しながらの謝罪に、あっけにとられていたがアリナはネカネに気にしないでといい自分からネカネを離れた。

二人は久々に一緒に帰り、アリナとネカネとネギとアーニヤの四人でささやかな卒業パーティーをした

空港→ロビー→

息を切らせながらネカネが走ってくるのが見えた。

「ごめんなさい。遅れてしまって」

「気にしないでいいですよ。どうせなら笑顔で送り出してほしいですね」

茶目つ気を聞かせた回答に、涙をぬぐい笑顔で

「いてらっしゃい。元気で生活をしてね、絶対に見送りに行くからね」

「ええ、いつてきます。ネカネ姉さんも元気で」
「うん」

アリナは飛行機に乗り麻帆良学園に旅立っていった。

第三話 出会い

麻帆良学園都市につくと電車に乗り、待ち合わせの場所に時間より少し早くつくと、着くとツインテールの女の子と黒髪の女の子が、誰か探してるようにきよろしていた。

待ち合わせの時間もあることだし彼女達に声をかけてこの地理について聞いておこうと思い彼女達に声をかけることにした。

アリナは金髪で同年代よりも身長が高く、ブランドの服装も確りと着こなしていて、かなりかつこよく目立っていた。

「すいませんが、道を聞きたいのですが」

二人はて、唐突に話しかけられたので、新手の軟派かとおもったが、アリナを見て違うことが解った。

それよりも、明らかに日本人でないアリナの流暢な日本語に二人は驚き、その女性的な美しさも兼ね備えたアリナに見られていた。アリナを見たツインテールの女の子が、アリナに何か懐かしいさを感じて突如アリナを抱きしめた。

突然の事にアリナは、パニックになりかけたが、ツインテールの女の子を見ると、目に涙が浮かんでいたので、彼女が落ち着くまでそのまま動かずに、彼女を安心させるために彼女の背に手を回して抱きしめた。

ツインテールの女の子も、突如襲った今まで感じたことの無い、懐かしさや切なさをアリナから感じ無意識に彼を抱きしめ涙を流していた。

彼女自身なぜ彼に、切なさや懐かしさを感じるのかわからないが、その衝動に今は身を任せこの心地よさに身をまかせていた。

それは、無自覚かもしれないが彼女自身の記憶に無い家族へのぬくもりを求めているようだった。

傍目に見ると、長らく離れ離れで暮らしていた姉妹の再開の抱擁のシーンだった。

黒髪の女の子は二人の様子をほほえましそうに見ていた。

黒髪の少女は普段のツインテールの少女の気質を知っているため嬉しそうに、ツインテールの女の子肩に手を置き微笑みながらいた

「アスナ。この子知り合いなん？」

アスナと呼ばれた女の子は自分がしている事に気づきあわててアリナを放し謝罪をしてきた。

「え、違うわよ。きみ、本当にごめんなさい」

「べつに、いいですけど。それより涙拭いてください」

と、言いアリナはハンカチを差し出した。

アリナが、指摘しハンカチを差し出したことで、ようやく自分が泣いていたことに気づいた。

「え、」

ほほに手を当て、アスナと呼ばれた女の子は自分が泣いていることに気づいた。

ほほを伝う、切なさや懐かしさが入り混じる涙の意味を彼女は現在知る由も無かった。

「あ、ありがとう。ちょっと迷惑かけたお詫びに、あそこで何か飲み物でもおごるわ」

ハンカチを受け取るとアスナは涙を拭きとると、近くのオープンテラスのある喫茶店を指差して、飲み物をおごるとアリナに言ってきた。

アリナ自身迷惑と思ってなかったが、彼女の心に罪悪感というしこりを残さないために彼女の提案を引き受けた。

「わかりました、ですが、迷惑ではないですよ。僕自身なぜか、初対面なはずなのに懐かしい感じはしていましたから」

二人の、いいように黒髪の女の子は二人に向かって楽しそうに言った。

「うー運命の出会いやね。アスナ」

「ちがうわよ」

思わず大きな声で、叫んでしまったので周りの視線を集めてしまった。

見た目、同姓に見えるためかなり嫌そうな感じでいったが、横目でアリナを見ると別段気にした様子は無かった。

その様子を見て、内心なぜかホッとしている自分に気づいたが、誤魔化すようにアリナたちの手を持ちオープンテラスのある喫茶店に行った。

「さ、さいくわよ！」

喫茶店のテーブルに着き注文をすると、アリナは自分達が名前を知らないことに気づき、自分から自己紹介をした。

「すいません、自己紹介がまだでしたね。僕の名前はアリナ・スプリングフィールドです。アリナと呼んでください」

アリナは自己紹介をした。

「ああ、ごめんなさい」

「おめんな」

二人は自分達が、まだ自己紹介をしていないことに気づき自分達も自己紹介をした。

「私の名前は、神楽坂アスナよ。私もアスナでいいわ」

「私の名前は、近衛このかや。私もこのかでいいよ」

二人は自己紹介をして三人で、たわいの無い雑談や自分の事など話していると三人の注文をした飲み物が届いた。

注文をした飲み物に口をつけ、ふとアリナに対して疑問が浮かんだ。

それは、なぜアリナがこの麻帆良学園にいるのかである。

アリナほどの容姿ならうわさや評判になり、麻帆良学園に広まっていないほうがおかしいからである。

「ねえ、アリナは、なんか用事で来たん」

このかがアリナのここにきた理由を聞いてきた。

「ええ、学校を卒業したので、知り合いに会いに来たんですよ。待ち合わせ場所はこのオープンテラスのある喫茶店の前です」

アリナは確りしているの、彼の知り合いはどのような人物なのか二人は興味がわいた

「その知り合いってだれなの？」

アスナは自分と同姓と想っているの、突っ込んで聞いてきた。

「名前は、高畑・T・タカミチです。関係は父の友人だそう、たまに僕の故郷にくるときに僕達を遊んでくれたことがあるひとです」

アスナは、高畑のところ、反応したが関係を聞き落ち着いた。

このかは自分達が探していた人物だということに気がついた。

「じゃあ、アリナがウェーズから来ると、いっとった高畑先生を訪ねてくるといっとった人なん？」

このかの問いにアリナは、一口飲物を飲み質問に答えた。

「客というか、ただ僕自身は単なる旅行のつもりで来てますし」

その答えに、アスナの年齢で一人旅をさせるなんて信じられなかった、親の事を聞いてきた。

「親御さんはなにしてるのよ？」

アリナは少し考えまっ、いいかと重い質問に答えた。

「いませんよ、二人とも戸籍上十年位前に亡くなつた事になりますから」

あつけらかーんとした物言いに聞いてはいけないことと思つた二人の心はすこしかるくなつた。

アリナはあえて、あつけらかーんとした物言い、言つた。

これは二人の表情が両親がいないことを聞いたため聞いてはいけないことと思ひ曇つたから、アリナ自身そのことについてはまったく気にしていないからである。

「気にしないでいいですよ。僕くらいの年齢で一人旅はまず無いのが当たり前ですので、それに僕達は親戚のお姉さんに育ててもらつたようなものです」

アリナの気遣いに、心の余裕を取り戻した二人は用件を思い出した。

「アスナ。高畑先生の用件をアリナに伝えないかんじゃない？」

このかはアスナに高畑の用事をアスナに思い出すようになった。

「じゃあ、アリナでいいのね高畑先生を今日たずねてくる人は？」

アスナの質問にアリナは、はいと答えた。

「じゃあついてきて、高畑先生急に出張が入ったんで私達が変わりに来ることになったの」

「うちは、アスナの付き添いな」

せつかくの土曜日なのに、高畑の代わりに迎えに来てくれた二人に改めて感謝をした。

注文した飲物も飲み終わり、アリナの案内のためアスナは会計をしようと伝票をとろうとすると、先にアリナが伝票をとり自分が会計を持つと言い出した。

「さつきまでならともかく、お二人の貴重な休みの時間に、手間をかけていただいたので僕が払います」

アリナのてこでも動きそうの無い様子にアスナが折れた。

「わかったわ。でも、いつかおごるからね」

その様子にこのかは、笑いながら言った。

「アスナも意地っ張りやな」

会計を済ますとアスナにタカミチの代わりに案内され目的地に向かった。

第四話 出会い二

アスナとこのかに連れられて、しばらく歩いていくとどんどん女の子ばかりになるのでアリナは、かなり動揺し始めていた。

まわりには自分より年上の異性がたくさんいて、その注目を集めてしまっているのが恥ずかしさや緊張で気づかないうちにいっぱいいっぱいになっていた。

そんな緊張している様子に気づかないアスナと、気づいてはいるがなぜ緊張しているのかわからないこのかはアリナに話しかけてきた。

「ねえ、アリナの用はなんなん？」

首をかしげながら疑問を聞いてきたこのかに、笑顔で答えた。

「前にタカミチが、日本に来るときはぜひ尋ねて来てほしいと言ったからだよ」

その様子に、アスナはアリナとタカミチがかなり親しい間柄だと解り少し機嫌が悪くなった。

「まあ、僕くらいの年齢の子供が、一人旅をするときにはちゃんと連絡先があつた方がいいですしね」

アリナは、解りやすいほど不機嫌になったアスナに対してフォロ―をし、アスナに自分が子供だからタカミチは、自分が友人の子供の日本での後見人を自ら申し出たと思うように言った。

表の理由はそうだが、裏の理由は魔法使いとしての力がどの位あるかわからないアリナに対して、様子を見て力がどのくらいかを見定めるためにタカミチがここに来るように言ったのである。

アリナの理由を聞いてアスナは機嫌を直した。

タカミチから自分が案内するということ意外何も聞いてないアリナはアスナに目的基地を聞いた。

「あの、どこに向かっているんですか？」

アスナは、タカミチから聞いてないことが意外なの不思議そう

な顔でいった。

「え、聞いてないの？麻帆良学園の学園長室よ」

自分に用のある人間は限られるが、学園長が用というのがかなり意外だった。

「は？何で学園長室なんですか？」

なぜ学園長室なのかわからないアリナはアスナに聞いた。

「さ、たぶん高畑先生が学園長に伝言か何かを頼んだんじゃない？」

アスナも疑問に思っていたのかアスナの疑問に疑問で返した。

アリナとアスナを見て、ニコニコしているこのかが二人を見て二人が仲の良い姉妹に見えて嬉しそうに言った。

「アスナとアリナって血がつながってるんじゃないん？」

このかの言いように、アスナとアリナの二人は、目を見合わせて瞬きを少し考えながら答えた・。

「このか、私にはたぶん血縁者はいないわ」

アスナは少し悲しそうに表情を変え答えた。

アスナの表情を見たこのかは、自分が言っではならないことを言ってしまったと思い、すぐにアスナにあやまった。

「ごめんなアスナ」

「いいわよ、このか悪気があったわけじゃないし」

アリナは考えがまとまったのか、さっきのこのかの質問に答えた。

「たぶんですが、母親方の血筋意の方で多少の繋がりはあると思います。アスナさんに会ったときものすごく懐かしい感じがしましたし、それにあったときに、初めて会うのにそうじゃないような感覚に教われましたから」

アリナの言いようにアスナは少し嬉しくなった。

天涯独の自分にも血縁の親族がいるかもしれないと言う事が解ったからである。

「アリナ、ありがとう」

少し湿っぽくなってきたので話題を変えるために学園長室のある

場所を聞いた。

「このかさん、学園長がいるが学園長室のある場所ってどこですか？」

アリナの質問にこのかが答えた。

「麻帆良学園女子中学校の学園長室だよ」

その答えにアリナは表情を引きつらせながら聞いてきた。

「麻帆良学園女子中学校の学園長室ですか………。何で不便な奥にある麻帆良学園女子中学校に学園長室にいるんですか……。学園長って変態ですか？」

アリナの雰囲気から出た言葉にアスナが疑問を持ちこのかの代わりに聞いてきた。

「なんで、学園長が変態なの」

アスナとこのかの微妙に不機嫌そうな、雰囲気にアリナはしまつたと思つたが後の祭りなので、誤魔化さずに自分の考えを言つた。

「普通この麻帆良学園見たいな場所の場合、麻帆良学園の中央に学園長室や会議室などの重要な場所を置きます。このように学園長室を奥の方にある麻帆良学園女子中学校に学園長室を置いておく自体がおかしいんですから、学園長室は中央にある学校に置いておくべきなんですから、何か学園長自身に目的が無ければほかの学校の迷惑になるので、絶対に奥の方の女子中学校には置きません」

「……まあ、あしかに」

「……そうやね」

アリナの説明に二人は即座に納得した。

学園長の信頼度がわかる一幕である。

そんなたわいも無い話をしながら学園長質についた。

学園長室

コンコンとノックをすると、入室の貴下が出たので学園長室に入った

学園長室に入りける綺麗な金髪の女性と妖怪っぽい生き物が学園長室にいた。

「おじいちゃん、つれてきたえ〜」

「学園長つれてきたわよ」

二人は入室すると言った。

「よ、妖怪・ぬらりひょん！！え、え〜〜〜」

アリナの言葉は、妖怪もどきの容姿を正確に捉えていた。

このかの言葉に驚き思わずこのかと見比べてしまった。

「ち、ちがう、わしは人間じゃ」

妖怪もどきは、弁明したがアリナはそれに取り合わず少し、遊ぶことにした。

「妖怪じゃない証拠をここで見せてください。その容姿から妖怪ぬらりひょんでしょう。ことあるごとに、自分が楽しければ良いと思い、事件を大きくさせて自は高みの見物をして、まわりが右左するのを楽しみにしていることや、早くひ孫を見たいというものすごくくだらない理由で、自分の孫に結婚を勧めたりしてるでしょう？まわりの教師にセクハラを働いたり、教師や生徒を巻き込み愉快犯的なこともしていますね。以上のことから妖怪・ぬらりひょんだと思います」

アリナは、完全に事前情報から相手の逃げ道をふさぎ、まわりが納得する理由で論破をした。

「まあ、そのとおりね」

「そのとおりやね」

「そのとおりです」

女性陣の答えに妖怪はへこみ咳払いをすると自己紹介をした。

「ごほん、わしがこの麻帆良学園の学園長近衛近右衛門じゃ」

「私は源しずなよ、よろしくね」

学園長は少し不機嫌そうに自己紹介をし、源しずなは日頃のセク

ハラなどの鬱憤を晴らしたかのごとく清々しい笑顔で自己紹介をした。

「イギリスから来た、アリナ」スプリングフィールドよろしくお願ひします」

アリナも二人に自己紹介をした。

「急に出張の入った高畑先生からの伝言を渡す前に、しばらくこの麻帆良にとどまってくれんかの主張の多い高畑先生の事業の遅れの穴埋めをしてほしいんじゃが」

その言いようにアリナは裏があることに気づいたがそしらぬ顔で答えた。

「僕は、旅行のつもりで日本に着たので、学園長の頼みでも聞くことはできません」

と、葉切りと断った。

アスナは高畑の授業が無くなるのではないかと心配したがアリナの答えに安心したが、心の何処かに引つかかるものがあつた。

「ふお、なぜじゃな？どうせ二月から働くことになるのじゃからいいじゃないかの？」

その言いように、アリナはカチンときた。

「あくまで、僕が働くのは二月からであり、今はいわゆる準備期間ですから」

全うな理由で反論するアリナを何とかこの麻帆良にとどめておきたい学園長はこの後どうするかをアリナに聞いた。

「この後、アリナ君はどうするつもりじゃな」

「タカミチの伝言を聞いた後、日本を旅行したいと思ってますが」アリナのお答えは学園長に逃げ道を結果的に与えてしまった。

それはアリナが、学園長からアリナに対する警戒心を無くすために意図して学園長に与えた逃げ道だった。

「高畑先生からの伝言じゃ。僕が以内間、授業がなかなか進まないで2・Aの授業だけで良いからたのむよじゃよ。ふおふおふお」その、笑い声にピキときたが、表に出さずタカミチの頼みなので

了解をした。

「わかりました。引き受けますが、すむところとかの手配はしていますか？」

この学園長のことだからしてないだろうなーと思いながらもいちを聞いてみた。

「時期が時期じゃし、職員寮もあいていないからの、そこでじや、このかにアスナちゃんアリナ君を止めてやってはくれんかね」
容姿が女性的なアリナを見て、学園長の提案に二人は少し考えて了承した

「まあ、学園長の頼みだしこの子確りしてるからいいわよ」

「このこ、かわいいからいいよ」

二人があっさり同居を了解したのでアリナは疑問に思い思い切つて聞いてみた。

「あの、このかさん、アスナさん良いんですか？僕は男ですよ？」

その問いかけに女性陣は驚愕の表情を浮かべた

このかとアスナは大声を上げてしまった

「え~~~~~」

まったく男に見えず髪の毛のキューティクルもしかりしているのに、男といわれてもまったく信じられなかった。

「年はいくつなん？」

アリナの年齢をこのかがきいてきた。

「数えで十歳ですが、同居の件ですが断つてもらって結構ですよ。年頃の女の子が年下とはいえ異性との同居には反対するのは当たり前ですから、この場合残念だけどタカミチの願いをきくことはできませんけど」

「わかったわよ。アリナは確りしているから同居してもいいわよ」
アリナの確りとした良いように、アスナは自分のいったことは守る思い同居を了承した。

アスナは本能的に理解していたアリナは、自分にとってかけがいの無い存在になるだろう事を無自覚に理解していた。

このかもアスナの様子に気づき微笑ましそうにみていた。

学園長室を出るともう夕方になっていたので、夕食の材料を買出しに三人で行き食材を買い寮に戻った。

夕食を食べいざ寝るときになってフトンが無いことに気づき、アリナはソファで寝るといったが、強引にアスナが自分のベットに連れ込み風邪を引かれると面倒だから一緒に寝なさいといい、渋るアリナを説得し一緒に寝た。

そのようすに、このかはアスナなりのやさしさが見て取れ嬉しそうに微笑みながら電気を切り自分も布団に入り眠りについた。

第五話 アリナとアスナ

夜が明けてきらない時間帯に、アリナは起きだしパジャマから、マホネットで買った込められた魔力で重さが変わるトレーニングウェアに、着替えるとアスナが起きだしてきた。

「うーん、う？アリナ、おはよー」

眠気眼をこすりながら、アスナはおきだした。

「すいません。起こしてしまいましたか？」

アリナはアスナを起こしてしまったと思いつくさまあやまった。

「うん、私も新聞配達のバイトだからいいわよ」

目覚まし時計の時間を見てアスナは本格的におきだした。

アリナはすぐさま洗面所にいきアスナに早く着替えるように言った。

アスナは、その子供らしかなぬ気遣いに苦笑いをして自分もパジャマから動きやすそうな普段着に着替え、洗面所にいるアリナに着替えたことを伝えた。

「ねえ、アリナ。私は新聞配達のバイトがあるから早く起きてるんだけど、なんでアリナがこんな早く起きてるの？」

アリナが洗面所から出てくると、アスナはなぜこの時間におきているのか聞いてきた。

「日課にしている、ランニングのために早く起きたんですけど」

アスナはアリナの回答に少し複雑そうな表情を見せて、アスナとアリナは一緒に寮を出た。

「アスナさん、まだ道が詳しくないので、今日のところはアスナさんの新聞配達のコースと一緒に走りますので案内よろしくお願いします」

アリナは昨日来たばかりなのであまり道が詳しくないので、とりあえずアスナの新聞配達と同じコースで走ることにした。

「ふーしゃないわね。今日だけよ。早く帰ってまた寝たいから、

遅かったら置いていくからね？」

時間を見て、あまりゆっくりとしていられないのでアスナは了承した。

「はい、アスナさんのペースで走ってもらってかまわないですよ」
アスナの言い分も尤もなのでアリナは了承した

「じゃあ、時間もないしいきましょ」

「はい」

二人は、このかを起こさないように静かに部屋を出て行った。

アスナは案内がてら、自分が配達するエリアをアリナをつれて新聞配達をしていたが、自分でも新聞を持って走るのは、息が切れるのにアリナは息一つ切らしていなかった。

男女の体力差はあっても、年齢的にアリナより自分のほうが体力はあるのが当たり前なのになぜアリナが息を切らせないかが不思議だった。

「ねえ、アリナ。なんでアリナは息が切れないのよ」

疑問を素直に聞いてみるとあっさりアリナはアスナに教えた。

「ただ単に、標高の高いところでトレーニングをしていたためだ
と思いますよ？」

事実、低酸素でのトレーニングは持久率などの向上になるからである。

「でも、すごいわよ。私は体力には自信が在ったんだけど、なんか自信なくすわ」

自嘲気味に答えたアスナに、アリナは慰めるわけでもなくただ自分が思っていることをストレートに言った。

「アスナさんは、優しいですね。」

「ななななな、なんで、いきなりそういうのよ」

突然のアリナの言葉にアスナは混乱してしまった。

「普通、自分が自信を持つてるものが、誰かに負けると大体その負けた人物に、八つ当たりをするのが普通です。ですが、アスナは体力が僕より無いという事実のみを受け入れて、八つ当たりをしなかったからです」

あまりのも正論でストレートな、物言いにアスナは赤くなった。

「むっ」

「早く行きましょう、アスナさん」

そう言うときアリナは足利出した。

「ま、待ちなさい！アリナ。言うだけ言って置いてくんじゃない！」

アスナもアリナを追いかけて走り出した。

アスナは新聞を配り終わり寮に帰還して、シャワーを浴びてから二度寝をした。

アリナはアスナの後にシャワーを浴び、時間を見て朝食の下準備に取り掛かった。

朝七時美味しそうな匂いにつられこのかが起きだして来た。

「おはよ、アリナ。美味しそうな匂いやね」

「おはようございます。このかさん」

このかは、アリナに朝の挨拶をするとアリナもこのかに挨拶をした。

このかはアリナの朝食の手際を見て、アリナの料理の腕がかなり高いことがわかり、自分も制服に着替えて朝食の手伝いをする事にした。

「うちも手伝うわ」

二人が協力して料理をしているときアスナも料理の匂いにつられ起きだして来た。

「このか、アリナ、おはよー」

「アスナ、おはよー」

「アスナさん、おはようございます」

三人は挨拶をするとアリナとこのかは、料理の盛り付けに入り、アスナは制服に着替えた。

「いただきます」「」

三人はいただきますという朝食を食べ始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6401p/>

（仮）牙を持つもの

2011年10月8日13時08分発行